「菅原道真仮託家集」B系統本の分類再考

山口正代

はじめに

菅原道真仮託家集・百首は武井和人氏によって、家集はA～F系統の六つに、百首も甲～己の六つに分類、整理されている。[1] しかし複雑多岐にわたっているため、全体の解明が進んでいないのが現状である。今回取り上げる家集B系統本はさらに甲と乙の二種類に分けられているが、分析していくとさらに細かい分類が可能であるようだ。道真仮託家集・百首は、編纂本（勅撰集等を中心に道真歌として伝えられている歌のなかから抄出し、まとめたもの）も入れると、百本以上あると言われている。本稿では、まず総歌数の最も多い家集B系統本の分類から確認しようとしたのであるが、乙諸本の分類等問題があり、B系統本だけでも把握することはそう容易ではない。

一　B系統・甲の構成について

そもそも武井氏はB系統本をなぜこのように分けたのであろうか。武井氏はB系統甲の諸本を紹介するときに次のように記している。

〈B・甲〉康応元年＋長禄4年奥書本系統
〔構成〕春・夏・秋・冬・恋・雑＋《康応元年奥書・イ》＋「月たにも（和歌）」＋《康応元年奥書・ロ》＋「天神様御作十二時之御詠」＋《長禄4年奥書[2]》（後略）

この場合の重要な点は二つの康応元年奥書（イ、ロ）と長禄四年奥書であろう。つまり構成に関わるまとまりの部分を重視しているのである。

武井氏が紹介している甲は次の七本である。[3] ただし諸本についての詳細は省略したが、新たに総歌数を付け加えた。

①龍谷大学附属図書館蔵「聖廟御詠」（以下「龍谷大学本」と略

す）【五七〇首】

②河野信一記念文化館蔵「菅家御集」（以下「河野本」と略す）【五七〇首】

③神宮文庫蔵「聖廟御詠」（以下「神宮文庫本A」と略す）【五〇三首】

④神宮文庫蔵「聖廟御詠」（以下「神宮文庫本B」と略す）【五七〇首】

⑤東京大学文学部国文学研究室本居文庫蔵「聖廟御詠」（以下「東京大学本」と略す）【五七〇首】

⑥国立国会図書館蔵「聖廟御詠」（以下「国会図書館本」と略す）【五六九首】

⑦岡山大学附属図書館池田家文庫蔵「聖廟和歌」所収「聖廟御詠」（以下「岡山大学池田家文庫本A」と略す）【五〇三首】

さらに⑧として武井氏未紹介のものを付け加える。

⑧天理大学附属天理図書館蔵「聖廟御詠」（以下「天理本」と略す）【五〇七首】

したがってここで扱うB系統・甲は全部で八本である。

武井氏は総歌数については触れておらず、またなぜこの順番で家集を並べたのか、その理由を明らかにしていない。しかし家集の分類においては構成だけではなく、総歌数の違い（六十七首の差がある）も考慮すべきである。そうすると甲は二つに分けたほうがよい。甲a③⑦⑧（総歌数五〇三首前後のもの）と甲b①②④⑤⑥（総歌数五七〇首前後のもの）に分けたい。

本稿では、甲b②河野信一記念文化館（昭和六三年四月に館名を河野美術館に変更）蔵「菅家御集」（略称は河野本）をB系統本（巻頭歌「東風吹かぜ匂ひをこせよ梅花八重山吹の花につゝみて」）全体の基準に置き、論を進めていく。本来であれば、善本を選び、それと比較しなければいけないのであるが、善本と決定するまでには慎重な作業が必要である。したがって善本を選ぶには、もう少し時間を要するので、ここでは便宜上、河野本を用いる。

河野本は奥書や書名もしくは詞書のようなもので分けると、五つのまとまり（〔1〕～〔5〕）を確認できる。甲aと甲bの構成を確認してみよう（〔　〕付き数字の下の甲a、甲bはその部分を含む、含まないを示す）。

〔1〕甲a、甲b

春部110首	（1～110）
夏部29首	（111～139）
秋の部108首	（140～247）
冬部35首	（248～282）
恋部31首	（283～313）
雑部156首	（314～469）

此御詠ハ應安八年二月廿五日花山院僧正菅家ノ
一流秘書御傳受之御持イ作不審條々（中略）
康應元年七月廿五日書寫之　應永七年十二月十一日書寫之　文安
三暦八月七日書寫之
（甲ａには「應永七年十二月十一日書寫之　文安三暦八月七日書
寫之」は見えない）

〔2〕甲ａ、甲ｂ
御詠廿五日イ首今河殿依夢想掘〔マヽ〕出御歌也
25首（470～494）
（中略）
于時康應第一己巳暦仲冬中旬五天書寫之

〔3〕甲ａ、甲ｂ
天神様御作イニ□マテナシ十二時之御詠
12首（495～506）
御詠一冊事（中略）
于時長禄肆年仲冬下旬之比録之也
（中略）
右之本書加様ニ有

〔4〕甲ｂ
聖廟御詠
32首（507～538）

〔5〕甲ｂ
聖廟御詠
春部
7首（539～545）
奥ニ
24首（546～569）
明應九年三月二日大雨の夜世間門〳〵に書し哥
1首（570）

B系統本甲ａ、甲ｂは、まず部立のある〔1〕（春・夏・秋・冬・恋・雑）があって、次に〔2〕「御詠廿五首」、〔3〕「天神様御作十二時之御詠」が確認できる。そして甲ｂはこれに〔4〕「聖廟御詠」と〔5〕「聖廟御詠」が加わる。すなわち甲ａの構成は〔1〕〔2〕〔3〕であり、甲ｂの構成は〔1〕〔2〕〔3〕〔4〕〔5〕である。

ただし甲ａと甲ｂにおける次の相違点は注意しなければいけない。〔1〕の書写年代の箇所である。この箇所は甲ｂでは「康應元年七月廿五日イニナシ書寫之」と書いてあって、実際にはその下に小さく二行に

分けて、いわば割注のように「應永七年十二月十一日書寫之」「文安三暦八月七日書寫之」と書かれている。しかし甲aには「康應元年七月廿五日書寫之」は書かれているが、割注のような部分、すなわち「應永七年十二月十一日書寫之」と「文安三暦八月七日書寫之」は見えない。これはいったい何を意味しているのであろうか。さらに〔2〕の奥書を見ると「于時康應第一己巳暦仲冬中旬五天書寫之」とある。つまり甲bの〔1〕で康應元年、應永七年、文安三暦とある後に〔2〕で康應第一と続くことは不自然である。甲aの場合は、康應元年七月の次は康應第一己巳暦仲冬になっており、特に問題はない。

二　B系統・甲の総歌数のこと

あらためて甲aと甲bに分けて並べてみよう。

甲a

〈1〉神宮文庫蔵「聖廟御詠」〔三・一二五三〕三本の「聖廟御詠」が合本、その一本目【五〇三首】〔資料館〕マイクロ〔三四―一三九―九〕紙焼〔C四六八五〕（略称は神宮文庫本A）

〈2〉岡山大学附属図書館池田家文庫蔵「聖廟和歌」上〔九一一・一三／三〇〕所収「聖廟御詠」【五〇三首】（略称は岡山大学池田家文庫本A）

〈3〉天理大学附属天理図書館蔵「聖廟御詠」〔九一〇・二＝一四三九＝一〇〕享保十年写【五〇七首】（略称は天理本）

甲b

〈1〉河野美術館蔵「聖廟御詠」〔三四六・八三九〕紅梅文庫旧蔵【五七〇首】〔資料館〕マイクロ〔七三―三五四―四〕紙焼〔C九一二七〕（略称は河野本）

〈2〉龍谷大学附属図書館写字台文庫蔵「聖廟御詠」〔二二・五九一・四〇／二〇〕【五七〇首】（略称は龍谷大学本）

〈3〉神宮文庫蔵「聖廟御詠」〔三・一二五二〕村井古巌奉納本【五七〇首】〔資料館〕マイクロ〔三四―一三九―八〕紙焼〔C四六八四〕（略称は神宮文庫本B）

〈4〉東京大学文学部国文学研究室本居文庫蔵「聖廟御詠」〔本居一〇八・九八五〕【五七〇首】〔資料館〕マイクロ〔四―五八―一〕紙焼〔C三一〇五〕（略称は東京大学本）

〈5〉国立国会図書館蔵「二十六家集」所収「聖廟御詠」〔二〇二・八七〕榊原芳埜旧蔵『元良親王集』『清慎公集』『高明親王集』『御堂関白集』と合写（一本目に所収）【五六九首】（略称は国会図書館本）

甲a、甲bそれぞれ総歌数に違いが生じているのであるが、どういうことなのか見てみよう。

まず最初は甲aの三本である。総歌数は、神宮文庫本Aと岡山大学池田家文庫本Aは五〇三首であり、天理本は五〇七首である。構

成でいうと甲aは甲bの〔1〕〔2〕〔3〕である。河野本の〔1〕〜〔3〕までの歌数は五〇六首であるから、これと甲a三本とで歌数に違いがあるということになる。

歌の脱落を見てみよう。神宮文庫本Aと岡山大学池田家文庫本Aには次の三首が見えない。なお和歌について、異文注記、ミセケチ等は省略し、異体字等はそのままとした。以下この方針に従う。河野本でいえば、

秋の部の一四番目で、歌番号153

松をなと時雨も露もそめさらん紅葉もさこそ青葉成しに

雑部の六八番目で、歌番号381

世中はまとろまて見る夢なれやさむる思ひに帰るならねは

雑部の一四九番目で、歌番号462

白浪のうちおとろかす岩の上にねいりて松の幾代へぬらん

である。神宮文庫本Aと岡山大学池田家文庫本Aは単純に三首脱落と考えてよい。

では天理本には歌の脱落はないのであろうか。次の二首が見えない。河野本でいえば、

雑部二五番目で、歌番号338

北野とは人のつけたる名也けり誠の廟のこれそまつ岡

雑部八一番目で、歌番号394

なからへて猶うき事のある度に露の命そわひしかりけり

ここまでの計算だと天理本は五〇四首のはずである。なぜ五〇七首なのか。天理本には、河野本の〔1〕〜〔3〕や神宮文庫本A、岡山大学池田家文庫本Aには見えない歌が三首加わる。

一首目は、河野本で言えば、春部で歌番号17「風吹はたか里まても梅花ちらて匂ふそよそにみちぬる」と同18「いにしへはあるしをしたふ梅もあり松はものをや思はさるらん」との間に、天理本の場合は「西吹は匂ひかへせよむめの花都の北に我はすむなり」が加わる。

二首目は、河野本で言えば、秋部で歌番号173「おほつかな秋はいかなる暮なれはこゝろに物の悲しかるらむ」と同174「おしむへき人はみしかき玉の緒のうき身ひとつは長き夜のゆめ」との間に、天理本の場合は「今宵誰篠吹風を身にしめて平野の嶽の月をみるらん」とその後に「新古今四巻に作者頼政とあり我本には御詠とあり」が加わる。

三首目は、河野本で言えば、秋部で歌番号199「草葉には玉と見えつゝわひ人の袖の涙の秋のしら露」と同200「まとろまてなかると思ふ須广鏡ほしの海にもとまらさりけり」との間に、天理本の場合は「まとろまて音をのみそなく萩の花色めく秋はすきにしものを」が加わる。

しかし、天理本の「西吹は」の歌は河野本の〔4〕「聖廟御詠」の四番目に歌番号510番として見える。また天理本の「まとろまて」

の歌は河野本の〔4〕「聖廟御詠」の五番目に歌番号511番、〔5〕「聖廟御詠」の一番目に歌番号539番として見える。しかしなぜ天理本が「西吹は」の歌、「まとろまて」の歌をここに置いているのかは不明である。天理本が、神宮文庫本Aや岡山大学池田家文庫本Aとくらべてやや複雑な本であることがわかる。

次に甲b五本についてはどうであろうか。総歌数を比較してみると、国会図書館本のみ五六九[4]首であり、他はすべて五七〇首である。これは夏部が二九首あるべきところが、国会図書館本では、河野本の夏部一六番目で、歌番号126「なてしこは何と、もなく匂へともをくれて咲そ哀なりける」が脱落し、二八首になったためである。

三　B系統・乙の構成について

解決しなければならない問題がまだ残されている。B系統・乙の構成、分類についてである。武井氏の乙の諸本の紹介の表記はなるべく残したままで次のように訂正する。

〈B・乙〉

康応元年＋応永7年＋文安3年奥書本系統

〔構成〕

春・夏・秋・冬・恋・雑＋《康応元年・応永7年・文安3年奥書》＋「月たにも…（歌）」＋「十二時御詠」[5]

武井氏が紹介している乙は次の五本である。[6]ただし諸本についての詳細は省略したが、①以外は新たに総歌数を付け加えた。

①高松宮蔵「聖廟御詠」（以下「高松宮本」と略す）

②神宮文庫蔵「聖廟御詠」（以下「神宮文庫本C」と略す）【四六六首】

③岡山大学附属図書館池田家文庫蔵「聖廟和歌」所収「聖廟御詠」（以下「岡山大学池田家文庫本B」と略す）【四六六首】

④駒沢大学附属図書館沼沢文庫蔵「聖廟御集」（以下「駒沢大学本」と略す）【五五八首】

⑤宮内庁書陵部蔵『待需抄』〔二六六・四〕六所収「十二時御詠」

※「天神様御作十二時之御詠」のみ。『俊成卿九十賀哥』他と合写。

ただし⑤宮内庁書陵部蔵『待需抄』六所収「十二時御詠」については、武井氏も述べているように、「天神様御作十二時之御詠」のみ、すなわち十二首の歌だけが収録されている。「十二時御詠」については、内題が正確には「十二時御詠　菅家御集」であって、ちなみにこの前後は何が収録されているかというと、直前は「中将姫山居語（ちゅうしょうひめさんのことば）」であり、直後は「一二三を句の上にすへて秋の哥よみける」である。つまり⑤「十二時御詠　菅家御集」が他の諸本とは性格の違うものであることは明らかである。ゆえにB系統・乙には含めないほうがよい。したがって現在確認できたB系統・乙は全部で四本で

ある。

ここで武井氏が高松宮本について紹介した箇所の一部を見てみよう。

①高松宮蔵「聖廟御詠」〔高二〇〕紙焼本による。なほ番号はフィルム番号（書陵部で管理してゐるもの）である。万治3年写。

〔奥書〕此秘書御伝受之時御詠不審／（中略）

〔資料館〕マイクロ〔二二―一七―二〕紙焼〔C七四二〕[7]

しかしこの〔奥書〕は間違いであって、実際には「此御詠者應安八年二月二十五日花山院僧正菅家之一流秘書御傳受之時御詠不審（後略）」で始まる。また高松宮本は、国文学研究資料館でマイクロフィルムと紙焼を確認できるが、両者とも一部抜け落ちている箇所がある。

高松宮本「聖廟御詠」の全頁については、国立歴史民俗博物館においてホームページで画像が公開されているので参照されたい。国文学研究資料館の高松宮本「聖廟御詠」の紙焼、マイクロフィルムについては、遊び紙が含まれていないということもあるが、欠落箇所は、国立歴史民俗博物館ホームページの画像でいうと15番目に該当する。国文学研究資料館の高松宮本「聖廟御詠」のマイクロフィルムと紙焼は見開き一丁分、表紙から数えて十四枚目が欠落しており、歌でいうと十一首が見えない。高松宮本の歌番号でいうと、175番～185番である。

175今宵たれす、吹風を身にしめて吉野の嶽の月をみるらん

新古今第四巻作者頼政と有家の本ニハ御詠と有

（中略）

185おほつかな野にも山にも白露の何ことをのみおもひをくらん

新古今天暦の御製とあり家本ニハ御詠とみ

えたり若夢想の御哥か口伝か有事也

したがって高松宮本の総歌数については、国立歴史民俗博物館ホームページの画像で確認すると五五三首である。

B系統・乙四本について見てみよう。神宮文庫本C（総歌数四六六首）、岡山大学池田家文庫本B（同四六六首）と、高松宮本（同五五三首）、駒沢大学本（同五五八首）とは総歌数に大きな差（八七首以上）がある。総歌数だけで判断するとB系統・乙は単純に二つに分けてもよさそうである。まず神宮文庫本Cと岡山大学池田家文庫本Bを乙a（総歌数は四六六首）と置くことにしよう。両者はほとんど違いはないので、どちらを乙aの基準に置いても問題はないが、ここでは神宮文庫本Cを用いてその構成を確認してみたい。乙aの構成は、甲a、甲bのそれとは少し違っている。第一節でB系統本全体の基準に置いた河野本にはあるが、神宮文庫本Cには記されていない箇所もあるので、比較のために、河野本を一部引用する。（引用箇所は▼▲で示す）

〔1〕乙a

春部	103首	（1～103）
夏部	29首	（104～132）
秋部	106首	（133～238）
冬部	33首	（239～271）
恋部	25首	（272～296）
雑部	109首	（297～405）

此御詠者應安八年二月二十五日花山院僧正菅家之
一流秘書御傳受之時御作不審條々（中略）
康應元年七月廿日書写之
應永七年十二月十一日書写之
文安三暦八月七日書写之

〔2〕乙a

御詠廿五首　今川殿依夢想被握(ママ)土御哥也

24首（406～429）

▼（中略）
于時康應第一己巳暦仲冬中旬五天書寫之▲

〔3〕乙a

十二時御詠

12首（430～441）

▼御詠一冊事（中略）
于時長禄肆年仲冬下旬之比録之也
（中略）
右之本書加様ニ有▲

〔4〕乙aにはなし

▼聖廟御詠

32首　▲

〔5〕乙a

▼聖廟御詠

春部

7首

奥ニ▲

24首（442～465）

明應九年三月二日大雨の夜世間門〳〵に書し哥

1首（466）

乙aの場合は〔1〕で歌の脱落が多く見られ、また〔4〕がな

く、〔5〕の一部（三二首のうちの後半の二五首）が続いていく。すなわち乙aの構成は〔1〕〔2〕〔3〕〔5（一部）〕である。

乙aと甲bの〔1〕における相違点で、最も問題にしたいのは、書写年代の箇所である。乙aでは次のように三行にわたって記されている。

康應元年七月廿日書写之
應永七年十二月十一日書写之
文安三暦八月七日書写之

第一節で述べたことと同じで〔2〕において甲bでは「于時康應第一己巳暦仲冬中旬五天書寫之」とあったのが、乙aでは見られない。つまり書写年代が康應元年、應永七年、文安三暦とある後に康應第一と続けることを避けたのであろうか。また〔3〕においては、甲bでは「御詠一冊事（中略）于時長禄肆年仲冬下旬之比録之也（中略）右之本書加様二有」とあったのが、乙aでは見られないのである。

四　高松宮本と駒沢大学本について

では高松宮本と駒沢大学本はどうであろうか。

まず高松宮本から確認してみよう。高松宮本は総歌数五五三首である。これは第三節で乙aと置いた神宮文庫本C、岡山大学池田家文庫本B（両者とも総歌数は四六六首）とくらべて八十七首も多い。では高松宮本の構成はどうであろうか。高松宮本は部立に歌数が記されてはいるものの、秋部、冬部、恋部、雑部には実際の歌数とは違う歌数が書かれているので、この点にも注意しながら、高松宮本の構成を確認してみよう。

〔1〕

春部百十首（1～110）
夏部二十九首（111～139）
秋部百十四首（140～257、実際には118首）
冬部三十七首（258～295、実際には38首）
恋部三十二首（296～331、実際には36首）
雑部百五十七首（332～491、実際には160首）

此御詠者應安八年二月二十五日花山院僧正
菅家之一流秘書御傳受之時御詠不審
條々（中略）
康應元年七月廿日書写之
應永七年十二月十一日書寫之
文安三年八月七日書寫之
万治三年二月廿五日書寫之

〔2〕

御詠廿五首　今出河殿依夢想被掘(マヽ)秘哥也

25首（492～516）

〔3〕

十二時之御詠

12首（517～528）

〔5〕（乙aと同じで〔5〕の後半部分）

御詠　二十五首

25首（529～553）

（553番歌の前に「明應九年三月二日大雨の夜世間門〳〵に書し哥」とある）

高松宮本の総歌数が増えた部分は、主に乙aで脱落した歌や甲bに見える歌が、全部ではないが収録されたためである。しかし、高松宮本の構成は、基本は乙aと同じ〔1〕〔2〕〔3〕〔5（一部）〕である。したがって高松宮本（総歌数五五三首）は、乙a（総歌数四六六首）と構成は似ているが、乙aとして扱うには総歌数が違いすぎるので、乙bと置くことにしたい。

次に駒沢大学本についてであるが、総歌数五五八首で、これだけで判断すると乙b高松宮本（五五三首）に近い。また甲b（総歌数五七〇首前後）にも近い。しかし、駒沢大学本は、これまで見てきた甲a、甲b、乙a、乙bとは全く違う構成、配列を持った本なのである。駒沢大学本の構成を見てみよう。

〔1〕

春128首	（1～128）	
夏33首	（129～161）	
秋113首	（162～274）	
冬37首	（275～311）	
戀34首	（312～345）	
雜174首	（346～519）	

〔2〕

御詠廿五首今河殿依夢想被撰出云々

27首（520～546）

〔3〕

十二時之御詠

12首（547～558）

右御詠應安八年二月廿五日花山院之御時菅家一流之

秘書僧正奏聞之時御不審條々（中略）
康應元年七月廿五日
應永七年十二月十一日
文安三暦八月七日
于時長禄四年仲冬下旬
（中略）
大雨の夜世間の門〳〵に書哥の事
梅あらはしつか伏やの門までも我立よらんあくましりそけ
（中略）
明應九年三月二日　　某謹言
寳暦十庚辰年二月五日　村好武書写

駒沢大学本が他のB系統本と大きく違う点は三点ある。一点目は、〔3〕「十二時之御詠」の後に書写奥書がまとめて書かれているということ。二点目はB系統本の基本的な構成である〔1〕〔2〕〔3〕を踏まえた上で、甲bに見られた〔4〕〔5〕、もしくは乙a、乙bに見られた〔5（一部）〕の歌を、全部ではないが、〔1〕の部立の適する箇所の最後の方に配列している（たとえば春の歌は春部に、冬の歌は冬部に）ということ。三点目は甲aにはなかったが、甲b、乙a、乙bにはあり、歌数にも入れた「明應九年三月二日大雨の夜世間門〳〵に書し哥」が、駒沢大学本の場合は、奥書の中で「大雨の夜世間の門〳〵に書哥の事」として扱われているということである。またこの三点以外では、甲a、甲bにはあり、乙a、乙bでは消えた「長禄肆年仲冬下旬」が、駒沢大学本では「長禄四年仲冬下旬」として復活していることも指摘できる。つまり駒沢大学本は甲にも乙にも属さない、特色のある本ということが言えるのである。そこで駒沢大学本をB系統・丙と置くことを提案したい。

以上ここまでの分類により、乙四本を次のように整理してみた。

乙a

〈1〉神宮文庫蔵「聖廟御詠」〔三一・一一五三〕三本の「聖廟御詠」が合本、その三本目（一本目にB・甲a〈1〉「聖廟御詠」所収）【四六六首】［資料館］マイクロ〔三四―一三九―九〕紙焼〔C四六八五〕（略称は神宮文庫本C）

〈2〉岡山大学附属図書館池田家文庫蔵「聖廟和歌」下〔九一一・一三／三〇〕所収「聖廟御詠」二本の「聖廟御詠」が合本、その二本目【四六六首】（略称は岡山大学池田家文庫本B）

乙b

〈1〉高松宮蔵「聖廟御詠」〔H―600―519る函242〕万治三年写（国立歴史民俗博物館のホームページで確認）【五五三首】（略称は高松宮本）

丙

〈1〉駒沢大学附属図書館沼沢文庫蔵「聖廟御詠」〔沼・七七八・一〕宝暦十年写【五五八首】（略称は駒沢大学本）

おわりに

武井氏は、道真仮託家集B系統本を構成の違いによって甲、乙の二つに分類しているが、分析を進めていくと乙には収まりきれない伝本があることがわかった。新たに丙を立ててよいのではないか、つまり道真仮託家集B系統本は大きく分けると甲、乙、丙の三種類に分けられるのではないかということである。さらに甲は構成の違いだけでなく、総歌数の違いも考慮すると甲a（総歌数五〇三首前後）と甲b（総歌数五七〇首前後）に、乙も総歌数の違いによって乙a（総歌数四六六首）と乙b（総歌数五五三首）に分類できる。したがってB系統本は五つに分類が可能なのである。そして次の課題になるが、本稿で着目した駒沢大学本をさらに分析することによって、道真仮託家集B系統本に関する疑問の解明に少しでも近づくことができると考えている。駒沢大学本については別稿で論じる予定である。

〔注〕

（1）武井和人氏『中世和歌の文献学的研究』（平成元年七月、笠間書院）。第5章「菅原道真仮託家集・百首研究序説」（四六三―五一六頁）。第6章「附載翻刻資料―道真家集・百首」（五一七―六一七頁）。なお「道真仮託家集・百首」諸本分類についての研究は、他には、小峯和明氏編『宝鏡寺蔵『妙法天神経解釈』全注釈と研究』（二〇〇一年七月、笠間書院）所収の渡辺麻里子氏「道真仮託歌集リスト」（四九二―五〇〇頁）がある。渡辺氏は「リスト作成においては、武井和人「菅原道真仮託家集・百首研究序説」（中略）を参照し、修正・追加を行った。修正点については、総説編「『妙法天神経』の和歌」の項を参照していただきたい。」と述べている。しかし、このリストは天神経の研究に必要なものが中心となっており、すべてを網羅しているわけではないので、本稿での基本的な分類は、おおむね武井氏の分類に従っている。

（2）武井氏、前掲書、四七四―四七四頁。

（3）武井氏、前掲書、四七四―四七五頁。

（4）国会図書館本は、武井氏、前掲書（五二八―五五二頁）に翻刻があり、総歌数は五六六首となっている。なお小林強氏は、龍谷大学仏教文化研究所編、責任編集家郷隆文氏、龍谷大学善本叢書18『四十人集』二（一九九八年三月、思文閣出版）で、「聖廟御詠」（三〇七―三八四頁）の解説（七一三―七一五頁）を書いている。すなわち龍谷大学本の解説である。そのなかで武井氏の国会図書館本の翻刻に触れているので、引用してみよう。

国立国会図書館本の総歌数は五六六首であるのに対して、四十人集本では国立国会図書館本には見えない和歌を四首含んでいるので、以下に武井氏が国会図書館本に付された一連番号を利用して掲げておきたい。

面影を霞の袖にとめかねて梅のにほひは風のたきもの（一〇八と一〇九との間）

なてしこは何と、もなく匂へともをくれて咲そ哀なりける（一二四

と一二五との間）

思ひきや逢ふれしさに引きかへてかく別路のうかるへしとは（三〇四と三〇五との間）

青柳の糸よりかけて鶯のぬふてふ笠は梅の花かさ（五四七と五四八との間）

このように小林氏は、国会図書館本には見えない歌で、龍谷大学本には見える歌を四首掲げている。確かに武井氏の翻刻にはこの四首は見えない。しかし実際に国会図書館本を見てみると、「なてしこは」の歌は見えないが、他の三首は収録されている。歌番号109「俤を……」、同306「おもひきや……」、同550「青柳の……」である。したがって国会図書館本の総歌数は五六六首ではなく、五六九首である。

（5）武井氏、前掲書、四七五―四七六頁。

武井氏は乙を次のように紹介している。

〈B・乙〉応安8年＋康応元年＋応永7年＋文安3年＋明応9年奥書

本系統

〔構成〕春・夏・秋・冬・恋・雑＋《応安8年・応永7年・文安3年奥書》＋「月たにて……（歌）」＋『天神様御作十二時之御詠』＋《明応9年奥書》（後略）

まず二箇所の「応安8年」と《明応9年奥書》は削除する。神宮文庫本Cで乙aの構成を確認すると、「応安8年」については、〔1〕（春・夏・秋・冬・恋・雑）の奥書に次のように見える。神宮文庫本Cで見てみよう。

此御詠者應安八年二月二十五日花山院僧正菅家之一流秘書御傳受之時御作（中略）

康應元年七月廿日書写之

應永七年十二月十一日書写之

文安三暦八月七日書写之

これは甲の〔1〕の奥書とほぼ同じである。第一節で取り上げたが、武井氏は甲の紹介においては「応安8年」を入れていない。乙の紹介においてもこれにあわせたほうがよいのではないか。また奥書には「康應元年七月廿日書写之」とあるので「康應元年」を入れることにする。一方《明応9年奥書》については、歌の直前に書かれている「明應九年三月二日大雨の夜世間門〳〵に書し哥」（神宮文庫本Cより引用）を指しているのだが、この場合は奥書ととらえないほうがよい。他にも気づいた点がある（傍線部）。なお「十二時御詠」については、甲では「天神様御作十二時之御詠」とあるのに対して、乙では「十二時御詠」と書かれているので、そのように訂正する。

（6）武井氏、前掲書、四七六頁。

（7）武井氏、前掲書、四七六頁。なお高松宮本については、『高松宮御所蔵旧有栖川宮御本マイクロフィルム目録』（宮内庁書陵部、昭和四十四年三月）には、次のようにある（三〇頁）。

	（員数）	（ネガ番号）	（コマ数）
聖廟御詠注　江戸写	一	高20	三六

また国立歴史民俗博物館資料目録［8―2］『高松宮家伝来禁裏本目録［奥書刊記集成・解説編］』（平成二一年三月、国立歴史民俗博物館）では、国立歴史民俗博物館の現在の資料番号、国文学研究資料館の所蔵する紙焼写真の請求番号等が確認できる（158（横19）頁）。

〔付記〕

貴重なご蔵書の閲覧をご許可いただいた人間文化研究機構国立歴史民俗博物館の皆様には、記して厚く御礼申し上げます。

―やまぐち・まさよ、広島大学大学院博士課程後期在学―